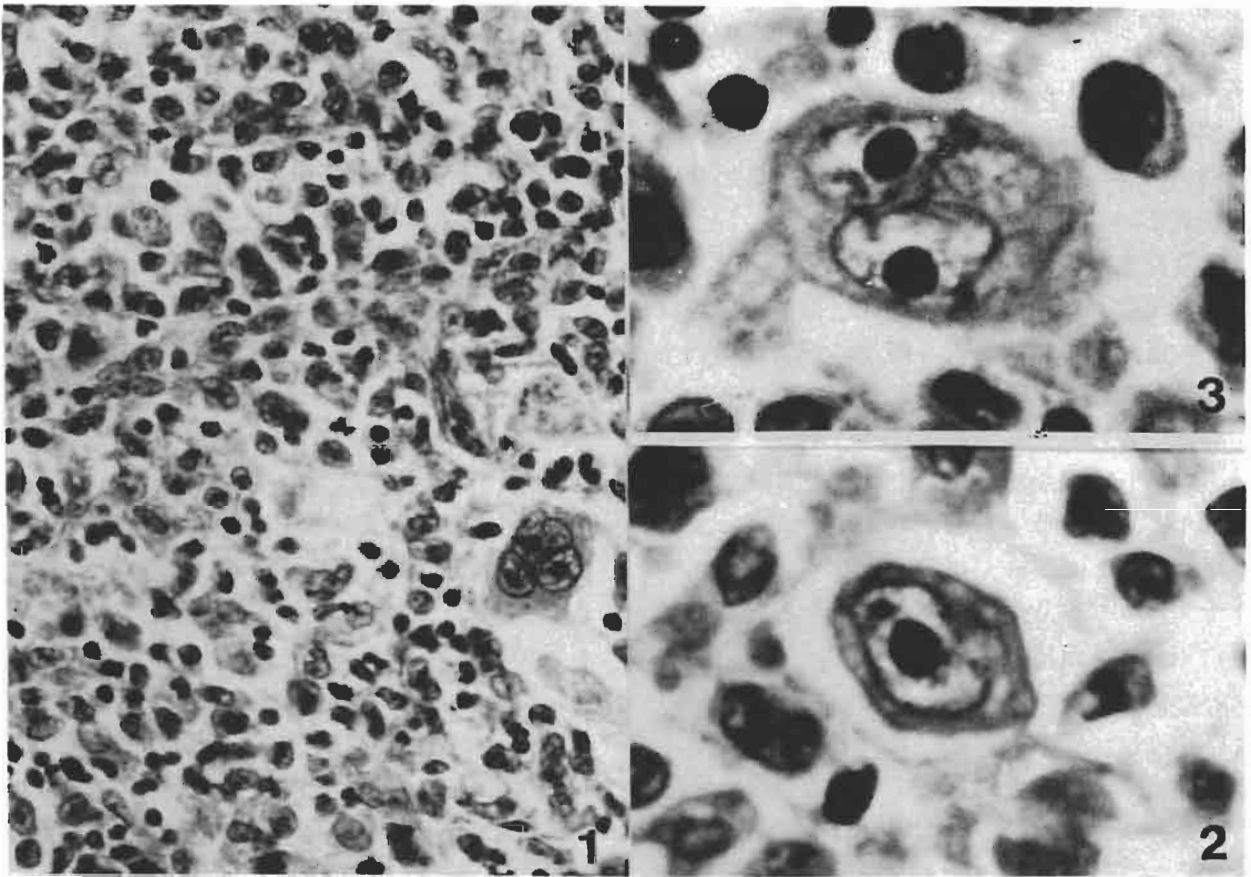


ネコのホジキン病

東京大学農学部獣医病理学教室出題 第30回獣医病理学研修会標本No.529



動物：ネコ，雄，年齢不明。

臨床的事項：元気消失を主訴として上診。試験的開腹により、尿管に癒着した径約3 cm大の腫瘤と、同様に径約3 cm大に腫大したリンパ節が認められた。この時腎腫大と腎機能不全(BUN 157.4mg/dl, Cre 8.2mg/dl)を認めた。

肉眼所見：腫瘤は両者とも表面は滑らかな被膜で覆われ、断面は乳白色・充実性で弾力があった。

組織学的所見：腫瘤はいずれも単核球を主とする細胞の瀰慢性増殖よりなり、小型円形のリンパ球様細胞、組織球様細胞、好酸性の核小体をもつ大型類円形の単核細胞とそれらが融合した様に見える多核巨細胞が認められた(写真1)。これらの大型細胞は様々な形態を示したが、エオジン好性の広い細胞質をもち、核は単核(写真2)や鏡像型の二核(写真3)あるいは多核で、核膜明瞭、核クロマチンは繊細で乏しく、このため核は明るく抜けた様に見えた。核小体は大型卵円形で、H E染色では特徴的な光輝性好酸性、周囲にhaloを認めた。これらの細胞は、ヒトのホジキン病の際に出現するReed-Sternberg細胞と非常に良く類似していた。また腫瘤全体に、硝子

滴状物を細胞質内に含む細胞が散在していた。これは貪食像かあるいは他の機転によるものと思われる。

この腫瘍細胞は、腫瘤以外にも肝、腎、胃粘膜下織に認められた。肝では間質にリンパ球を伴って腫瘍細胞が小巣状に浸潤しており、肝細胞はグリコーゲン変性や壊死に陥っていた。腎では間質に腫瘍細胞、リンパ球、線維化が認められ、糸球体の硬化、腎被膜の肥厚を伴っていた。胃粘膜下織では、結合織内に腫瘍細胞が巣状に存在していた。脾臓ではリンパ濾胞の萎縮性変化を認めたが、腫瘍細胞は浸潤していなかった。

ヒトにおけるホジキン病は悪性リンパ腫の一つで、組織学的に特有なReed-Sternberg細胞が出現すること、参加しているリンパ球に特異的な変化が見られないこととされており、種々の程度に炎性細胞の浸潤、壊死、線維化を伴うものがある。現在までにホジキン様病変も含めて犬で7例、猫で2例の報告がある。今回の症例では、隣接する2個のリンパ節が侵襲を受けていること、腫瘍病巣が好酸性の核を持ちReed-Sternberg細胞に類似する特徴的な細胞からなることから、ホジキン病と診断した。